

# 博士論文（要約）

論文題目

路地と世界—

世界文学論から読む中上健次作品研究

氏名

今井 亮一

目次

序章 中上健次と世界文学	1
1. 世界文学という学問	
2. 世界文学論とナショナリズムの距離	
1. 比較における「パブリック」度	
2. 「自由」と多文化主義	
第1章 「岬」ならびに『枯木灘』再訪——私的空間としての路地	27
1. はじまりとしての「岬」	
1. 「岬」の位置付け——『枯木灘』との接続と断絶	
2. 「母殺し」としての「岬」	
3. 「兄の自殺」の物語	
2. 『枯木灘』での転回と深化	
1. 「岬」から『枯木灘』へ——通過点としての『枯木灘』	
2. 「父殺し」の内実	
3. 父殺しの二つの「完遂」	
4. 「日本のフォークナー」（中上健次とフォークナー I）	
第2章 中期作品群の深まり——路地と脱国民国家 <sup>ネーション</sup>	53
1. 「中期」の位置付け——先行研究概観	
2. 文体的自己批判——中期作品における「翻訳」プロセス	
1. 中上健次と <sup>トランスレーション・スタディーズ</sup> 翻訳研究	
2. 翻訳と共同体	
3. 内容的自己批判——秋幸三部作の変貌	
1. 母系制と父殺し	
2. 「物語」との抗争	
3. 「月と不死」について——中上健次とネフスキー	

1. 路地の消滅と「時代性」
  1. 路地の消滅について——中期と後期の境界（の曖昧さ）をめぐって
  2. 「同時代性」について——村上春樹と中上健次
2. 『地の果て 至上の時』——摩滅する基盤
  1. 龍造と〈超越性〉
  2. 「水の信心」ならびに龍造のロマン的イロニー
  3. 朋輩とジンギスカン

1. 路地の消滅と「温存」
  1. 『日輪の翼』——維持されるアイデンティティ
  2. イーブとツヨシの（不）等式——『讃歌』前半のアイデンティティ
  3. オバたちの「変容」
  4. （ビ）カミングアウトと〈ファグ・ハグ〉
2. 中上の中後期作品と「世界-文学」——理論的整理
  1. 「近代性」と「中心／周縁」をめぐって
  2. 「南」の作家（中上健次とフォークナーⅡ）

1. 『異族』第1・2期——グローバル・サウスの連帯の限界
2. 『異族』完結篇の限界と世界文学論の可能性

## 本文

本論文の全文はすでに出版されており、契約により公表できない。  
書誌情報は以下の通りである。

今井亮一『路地と世界——世界文学論から読む中上健次』松籟社、2021年。  
ISBN 978-4-87984-402-6

## 引用文献一覧

- 秋草俊一郎「術語としての「世界文学」 1895-2016」『文学』(2016年9・10月号) 3-24頁。  
——「訳者解説」エミリー・アプター『翻訳地帯』慶応義塾大学出版会、2018年、393-402頁。
- 浅田彰「移動と変身 新たな旅立ちのために」『中上健次全集7月報』集英社、1995年、6-15頁。
- 浅田彰、いとうせいこう、マッツ・カールソン、柄谷行人、高澤秀次、野谷文昭、渡部直己「シンポジウム フォークナーと中上健次」『早稲田文学』(2003年11月号)、4-39頁。
- 浅野麗「これから中上健次を論じるために」『中上健次集月報IX』インスクリプト、2017年、2-15頁。
- 『喪の領域 中上健次・作品研究』翰林書房、2014年。
- 東浩紀『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン、2017年。
- 東浩紀、前田墨「父殺しの喪失、母萌えの過剰 フラットな世界で中上健次を読み直す」『ユリイカ』(2008年10月号)、66-79頁。
- アプター、エミリー『翻訳地帯 新しい人文学の批評パラダイムにむけて』秋草俊一郎・今井亮一、山辺弦・坪野圭介訳、慶応義塾大学出版会、2018年。[Apter, Emily. *The Translation Zone: A New Comparative Literature*. New Jersey: Princeton University Press, 2006.]
- アンダーソン、ベネディクト『定本 想像の共同体』白石隆・白石さや訳、2007年、書肆工房早山。
- 安藤宏『日本近代小説史』中央公論新社、2015年。
- 『「私」をつくる 近代小説の試み』岩波新書、2015年。
- 井口時男「解説 声の方へ、揺らぐものの方へ」中上健次『風景の向こうへ・物語の系譜』講談社文芸文庫、2004年、342-354頁。
- 『危機と闘争 大江健三郎と中上健次』作品社、2004年。
- 池澤夏樹『「讃歌」が書かれるまで』『中上健次選集8』小学館文庫、1999年、467-473頁。
- いとうせいこう「移動のサーガ／サーガの移動」『中上健次選集5 日輪の翼』小学館文庫、1999年、399-406頁。
- 「影の眼」『中上健次集6』インスクリプト、2014年、436-453頁。
- ヴィンセント、キース・風間孝・河口和也『ゲイ・スタディーズ』青土社、1997年。
- 上野俊哉『ディアスポラの思考』筑摩書房、1999年。
- 内田樹『村上春樹にご用心』アルテスパブリッシング、2007年。
- 江藤淳『自由と禁忌』河出文庫、1991年。
- 大江健三郎、中上健次「対談 多様化する現代文学」『新潮』(1980年1月号)、198-234頁。
- 大澤真幸「「未来の他者」と中上文学」『集英社クオータリー コトバ』(2016年冬号)、54-

- 57 頁。
- 『不可能性の時代』岩波新書、2008 年。
- 『増補 虚構の時代の果て』ちくま学芸文庫、2009 年。
- 大塚英志『サブカルチャー文学論』朝日文庫、2007 年。
- 大橋洋一「ご主人を拝借 フラグ・ハグとクィア理論」『ユリイカ』（1996 年 11 月号）、120-127 頁。
- オング、ウォルター・J『声の文化と文字の文化』林正寛・糟谷啓介・桜井直文訳、藤原書店、1991 年。
- カールソン、マツ「欧米における中上健次批評概観」今井亮一訳『中上健次集月報Ⅳ』インスクリプト、2014 年、2-13 頁。
- 「中上健次とフォークナー」高澤秀次訳『早稲田文学』（2003 年 11 月号）、40-53 頁。  
〔Karlsson, Mats. *The Kumano Saga of Nakagami Kenji*. Stockholm: Stockholm Universitet, 2001.〕
- 加藤九祚「解説 ニコライ・ネフスキーの生涯」ニコライ・ネフスキー『月と不死』岡正雄編、平凡社、1971 年、261-351 頁。
- 柄谷行人『坂口安吾と中上健次』講談社文芸文庫、2006 年。
- 『終焉をめぐる』講談社学術文庫、1995 年。
- 柄谷行人、高澤秀次「中上健次と津島佑子」『文學界』（2016 年 10 月号）、140-157 頁。
- 後藤和彦『敗北と文学 アメリカ南部と近代日本』松柏社、2005 年。
- コルニエツツ、ニーナ「中上健次における身体」竹内孝宏訳『批評空間』（第Ⅱ期第 14 号）、247-265 頁。〔Cornyetz, Nina. “The Body: Deformities, Nasty Blood, and Sexual Violence,” *Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers*. Stanford: Stanford University Press, 1999, pp. 186-204.〕
- 斎藤環『関係の化学としての文学』新潮社、2009 年。
- 佐藤綾佳「中上健次『枯木灘』 「紀子」という名から見る〈秋幸サーガ〉の構造」『牛王』（10 号）、150-167 頁。
- 柴田勝二『中上健次と村上春樹 〈脱六十年代〉的社会のゆくえ』東京外国語大学出版会、2009 年。
- 鈴木華織「“一番はじめ”にあったもの 「一番はじめの出来事」論」『牛王』（10 号）、84-103 頁。
- 鈴木貞美『日本の「文学」を考える』角川選書、1993 年。
- 諏訪部浩一『ウィリアム・フォークナーの詩学 1930-1936』松柏社、2008 年。
- 千石英世『アイロンをかける青年』彩流社、1991 年。
- ソポクレス『エレクトラ』松平千秋訳『ギリシア悲劇Ⅱ ソポクレス』筑摩書房、1986 年、219-300 頁。
- 高澤秀次『評伝 中上健次』集英社、1998 年。
- 高山文彦『エレクトラ 中上健次の生涯』文藝春秋、2007 年。

- 武田将明「デジタル時代のピカレスク」『新潮』(2016年9月号)、260-261頁。
- 竹村和子「「噂」の俳優 グレタ・ガルボをクィアに見る」『ユリイカ』(1996年11月号)、190-203頁。
- 田中克彦『ことばと国家』岩波新書、1981年。
- ダムロッシュ、デイヴィッド『世界文学とは何か?』秋草俊一郎・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦訳、国書刊行会、2011年。
- 友常勉『脱構成的叛乱 吉本隆明、中上健次、ジャ・ジャンクー』以文社、2010年。
- トロツキー『ロシア革命史(一)』藤井一行訳、岩波文庫、2000年。
- 中上健次「毒虫ザムザ」『翻訳の世界』(1983年5月号)92頁。
- 『中上健次全集1』集英社、1995年。
- 『中上健次全集3』集英社、1995年。
- 『中上健次全集5』集英社、1995年。
- 『中上健次全集6』集英社、1995年。
- 『中上健次全集7』集英社、1995年。
- 『中上健次全集12』集英社、1996年。
- 『中上健次全集14』集英社、1996年。
- 『中上健次全集15』集英社、1996年。
- 『中上健次発言集成3』第三文明社、1996年。
- 『中上健次発言集成4』第三文明社、1997年。
- 『中上健次発言集成6』第三文明社、1999年。
- 中上健次、村上春樹「対談 仕事の現場から」『国文学 解釈と教材の研究』學燈社(1985年3月号)、6-30頁。
- 中川成美『モダニティの想像力 文学と視覚性』新曜社、2009年。
- 仲里効『悲しき巫言語帯 沖縄・交差する植民地主義』未来社、2012年。
- 沼野充義「解説 世界文学は、君がそれをどう読むかだ」デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』国書刊行会、483-495頁。
- 「世界(文学)とは何か? 理念、現実、実践、倫理」『思想』(2019年第11号)、9-23頁。
- 「Toward a New Age of World Literature」『れにくさ』(1号)、188-203頁。
- ネフスキー、ニコライ『月と不死』岡正雄編、平凡社、1971年。
- 野口道彦、戴エイカ、島和博『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店、2009年。
- 野谷文昭「語りが生んだ記憶の町」『別冊太陽 日本のこころ199 中上健次』平凡社、2012年、30-37頁。
- 蓮實重彦、渡部直己、浅田彰、柄谷行人「中上健次をめぐって 双系性とエクリチュール」『批評空間』(12号)、18-45頁。
- 早川敦子『翻訳論とは何か 翻訳が拓く新たな世紀』彩流社、2013年。

- 平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2010年。
- 『小説における作者のふるまい フォークナー的方法の研究』松柏社、2003年。
- 『メランコリックデザイン フォークナー初期作品の構想』1993年、南雲堂。
- 平野啓一郎『私とは何か 「個人」から「分人」へ』講談社現代新書、2012年。
- ブルーム、ハロルド『影響の不安 詩の理論のために』小谷野敦、アルヴィ・宮本なほ子訳、新曜社、2004年。
- マリノウスキー、B『新版 未開人の性生活』泉靖一・蒲生正男・島澄訳、新泉社、1999年。
- 丸谷才一「選評」『中央公論』（1989年11月号）、389-390頁。
- 三浦雅士編『ポストモダンを超えて 21世紀の芸術と社会を考える』平凡社、2016年。
- 御厨貴・阿川尚之・苅部直・牧原出編『舞台をまわす、舞台がまわる 山崎正和オーラルヒストリー』2017年、中央公論新社。
- 村上春樹「芥川龍之介 ある知的エリートの滅び」ジェイ・ルービン編『芥川龍之介短篇集』新潮社、2007年、29-50頁。
- 『1973年のピンボール』講談社文庫、2004年。
- 『羊をめぐる冒険 上』講談社文庫、2004年。
- 『羊をめぐる冒険 下』講談社文庫、2004年。
- 村上春樹、柴田元幸「共同体から受け継ぐナラティヴ」マキシーン・ホン・キングストン『チャイナ・メン』藤本和子訳、新潮文庫、2016年、541-553頁。
- 森鷗外『普請中・青年 森鷗外全集2』ちくま文庫、1995年。
- モレットィ、フランコ『遠読 〈世界文学システム〉への挑戦』秋草俊一郎・今井亮一・落合一樹・高橋知之、みすず書房、2016年。[Moretti, Franco. *Distant Reading*. London, New York: Verso, 2013.]
- 山崎正和『世界文明史の試み 神話と舞踊』中央公論新社、2011年。
- 梁石日『アジア的身体』平凡社ライブラリー、1999年。
- 吉行淳之介、丹羽文雄、井上靖、永井龍男、瀧井孝作、中村光夫、安岡章太郎「芥川賞選評」『文藝春秋』（昭和51年3月特別号）、342-344頁
- 吉本隆明『マス・イメージ論』講談社学術文庫、2013年。
- 四方田犬彦『貴種と転生・中上健次』ちくま文庫、2001年。
- リーヴィ、イアン・英雄「オリュウノオバのマジカル・モーニング」『翻訳の世界』（1983年8月号）、97頁。
- 「シンタックスの波を搔き分けて」『翻訳の世界』（1983年5月号）、93頁。
- 渡邊英理「熊野の地／血をめぐる文学」『牛王』（10号）、189-194頁。
- 渡部直己「「天皇」小説としての『異族』」『中上健次選集2』小学館文庫、1998年、941-952頁。
- 『中上健次論 愛しさについて』河出書房新社、1996年。
- 渡辺靖『〈文化〉を捉え直す カルチュラル・セキュリティの発想』岩波新書、2015年。



- Apter, Emily. *Against World Literature: On the Politics of Untranslatability*. London, New York: Verso, 2013.
- Bassnett, Susan. *Translation*. London, New York: Routledge, 2014.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. 1957. Baltimore: The John Hopkins University Press, 1980.
- D'haen, Theo. *The Routledge Concise History of World Literature*. London, New York: Routledge, 2012.
- Dodd, Stephen. "Japan's Private Parts: Place as a Metaphor in Nakagami Kenji's Works," *Japan Forum*, 8: 1 (March 1996), 3-11.
- Eagleton, Terry. *The Event of Literature*. New Haven: Yale University Press, 2013.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. 1936. New York: Vintage, 1990.
- Fowler, Edward. *The Rhetoric of Confession: Shishosetsu in Early Twentieth-Century Japanese Fiction*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1988.
- Marcus, Greil, and Sollors Werner, eds. *A New Literary History of America*. Cambridge: Harvard University Press, 2012.
- Matthiessen, Francis Otto. *Translation: An Elizabethan Art*. 1931. New York: Octagon Books, 1965.
- McKnight, Anne. *Nakagami, Japan: Buraku and the Writing of Ethnicity*. Minneapolis: the University of Minnesota Press, 2011.
- Monnet, Livia. "Ghostly Women, Displaced Femininities and Male Family Romances: Violence, Gender and Sexuality in Two Texts by Nakagami Kenji: Part 1," *Japan Forum*, 8: 1 (March 1996), 13-34. [モネ、リヴィア「幽霊的な女たち、置き換えられた女性性、そして男性家族小説——中上健次の二つのテキストにおける暴力、ジェンダー、そしてセクシャリティの政治学1」竹内孝宏訳『批評空間』(第Ⅱ期第10号)、156-179頁。]
- Moretti, Franco. *Graphs, Maps, Trees: Abstract Models for a Literary History*. London: Verso, 2005.
- Morris, Mark. "Gossip and History: Nakagami, Faulkner, García Márquez." *Japan Forum*, 8:1 (March 1996), 35-50.
- North, Michael. *The Dialect of Modernism: Race, Language, and Twentieth-Century Literature*. New York: Oxford University Press, 1994.
- Sanders, Julia. *Adaptation and Appropriation*. London: Routledge, 2005.
- Walkowitz, Rebecca L. *Born Translated: The Contemporary Novel in an Age of World Literature*. New York: Columbia University Press, 2015.
- . "The Location of Literature: The Transnational Book and the Migrant Writer," *Contemporary Literature*, Vol. 47, No. 4 (Winter, 2006), 527-545.
- Rubin, Jay. *Haruki Murakami and the Music of Words*. London: The Harvill Press, 2002.

- Thomsen, Mads Rosendahl. *Mapping World Literature: International Canonization and Translational Literatures*. London, New York: Continuum, 2008.
- Warwick Research Collective, The. *Combined and Uneven Development: Towards a New Theory of World-literature*. Liverpool: Liverpool University Press, 2015.
- Zimmerman, Eve. *Out of the Alleyway: Nakagami Kenji and the Poetics of Outcaste Fiction*. Cambridge: Harvard University Press, 2007.

## 論文の内容の要旨

論文題目：路地と世界—世界文学論から読む中上健次作品研究

氏名：今井 亮一

本論文は、中上健次作品を世界文学論の枠組みで論じたものである。21世紀の欧米で盛んになった世界文学論の主要な潮流については、序章でフランコ・モレッティ、デイヴィッド・ダムロッシュ、エミリー・アプター、ウォリック・リサーチ・コレクティブなどを具体例に挙げて紹介・検討する。以降の本論では、特にその反／脱ナショナリズム的な傾向と中上作品の性格が呼応していく様を見ていくが、序章の第2節では、大澤真幸の「自由」をめぐる議論を参照しながら文学作品を比較する際の枠組みについて考察することで、世界文学論が各国文学の基盤から離れることはできず、また離れるべきではないことも示す。

第1章では、一般に秋幸三部作の始まりと位置付けられている短篇「岬」と、その続篇である『枯木灘』を論じる（三部作の最後たる『地の果て 至上の時』については第3章で扱う）。これらの作品は、主人公・秋幸による父殺しの物語だと概括されがちであるが、第1節では「岬」の精読を通じ、父殺しというまとめは単純化に過ぎ、むしろ母殺しの主題こそが中上作品の始まりにあったことを示す。また、秋幸三部作をはじめ、本論文が目指す主

要な中上作品は、作家が生まれた和歌山県新宮市の被差別部落をモデルとし、作中では「路地」と呼ばれる文学的トポスを舞台とするが、「岬」では母殺しから広がる血縁への憎悪が、路地という地縁への憎悪となっていることも明らかにする。第2節では、秋幸の抱くこうした母や路地への憎しみの主題が『枯木灘』においては緩和され、父殺しへまとめられてゆく様を精読によって示す。秋幸は実父・龍造と直接的な対峙をするなかで、母を赦し、自らが路地を代表する存在となることを選ぶのである。さらに、この秋幸対龍造の図式が、中上対ウィリアム・フォークナーの構図に重なることも論じる（中上は柄谷行人の勧めでフォークナー作品を読み、多大な影響を受けたことが知られている）。中上は自らをモデルに造形した主人公・秋幸に、『枯木灘』を通じて龍造の物語を奪わせることで、「日本のフォークナー」になったと小説的に宣言している。

第2章では中上の中期作品を、世界文学論の重要な一分野である トランスレーション・スタディーズ 翻訳研究の視点から論じる。第1節でまず、中上に関する日本語と英語の先行研究を概観しつつ「中期作品」の具体的な範囲を画定し、この時期の作品群の主要な性格として、社会的関心を深めた中上が文体を変容させ、初期作品への自己批判を顕著に行なうようになったことがあると示す。なお、近年の中上研究においては、被差別部落出身という作家の出自を強調してとすべきか、初期作品にまでさかのぼって差別の主題を積極的に読み込む傾向にあるが、中上は差別といった問題に正面から取り組むようになったのは、作家としての地位を確立して社会的関心を深めた後、つまりあくまで中期作品以降である。第2節では『紀州 木の国・根の国物語』と『千年の愉楽』を主に取り上げ、中期作品に特有の複雑な文体が、中上が路地⇨被差別部落の文化への理解を深めた結果、標準的な「書き文字」では路地の現実を描くことができないと認識し、路地の「語り言葉」と「書き文字」とのあいだで一種の「翻訳」を行なって生み出したものであることを跡付ける。またこの「翻訳」は、路地と、日本という国家とのあいだの溝を大きくし、特に『千年の愉楽』の最終2短篇において、文体のみならず内容においても国民国家の枠組みを曖昧にしている。以上のように2節が文体的変容に注目するのに対し、3節では『熊野集』と『物語の系譜』を通じて行なわれた中上の自己批判を論じる。初期作品では路地の現実を捉え損ねていたと考えた中上は、「岬」結末の秋幸と異母妹とのあいだのエディプス的な近親姦を、母系社会の路地ではほとんど無意味だと批判し、さらにフォークナーの『アブサロム、アブサロム!』のトマス・サトペンを元に造形した『枯木灘』の龍造は、現実の実父と似ても似つかないと批判するようになる。初期作品における中上は、例えば「エディプス的な父殺し」といった物語の型に依拠して積極的に反復を目指していたが、中期以降はこうした「物語」では路地を描けないという自己批判を行なうようになる。その結果、ステレオタイプに接近するような物語の基本的な型を多く作中に導入しながら、単純にそれらを反復するのではなく、そうした様々な型の中から「最も悪くない」物語が半ば自然発生的に見出されるのを待つという詩学の変化が見られる。

第3章では、世界文学論でもしばしばトピックとされる「資本主義」をキーワードに、『地の果て 至上の時』を論じる。同作以降の中上作品はしばしば後期作品と呼ばれ、中上文学

の到達点として高く評価する批評家がいる一方、早くから中上を評価していた批評家たちの中にも、中上が時代の傾向に流され、筆力の衰えが見られると批判する者があり、毀誉褒貶の入り混じった評価を受けている。こうした事情を踏まえて第 1 節では、柄谷や大澤が「同時代的」な作品として村上春樹の『1973 年のピンボール』を取り上げている論考を補助線に、後期中上作品の「同時代性」を詳らかにする。『地の果て』の路地は、同時代の現実の新宮の被差別部落と同様に解体され消失しているが、実際の同和对策事業は政治駆動的な性格が強いのに対し、作中では路地解体の経済駆動的側面が強調され、資本主義的消費社会への変容という性格が描き出されている。2 節ではこうした「資本主義」のもたらした変容が、「水の信心」という新興宗教や、龍造や秋幸の思考・振舞いにも看取されることを作品精読によって明らかにする。こうした登場人物たちの振舞い、特に秋幸が結末で「ジギスカン」の物語に依拠する様子は、柄谷が村上批判で用いた「ロマン的イロニー」による歴史・現実の忘却と相通的であり、これが先行研究における『地の果て』評価の分裂の所以となっている。

第 4 章の第 1 節では、『日輪の翼』とその続篇『讃歌』を論じる。『日輪の翼』は、4 人の若衆と 7 人の老婆が解体された路地を出て東京へ至るまでの奇妙な聖地巡礼を描いた作品であり、また『讃歌』は、『日輪の翼』の若衆のひとりが東京で男娼を行なっているという設定をもつ。このように両作とも、路地出身者たちが路地のない世界でどのようなアイデンティティを得られるかという『地の果て』の主題を、ジェンダーなども視野に入れつつ引き続き検討している。多くの先行研究は、『日輪の翼』と『讃歌』を通じて登場人物たちのアイデンティティが根本的に変化していると論じるのだが、本論文ではむしろ、彼らは路地のない世界でも路地の文化を継承しようとしている点に注目し、彼らのアイデンティティの維持に焦点を当てる。先行研究がアイデンティティの変化を強調しがちなのは、路地と東京という二項対立に、前近代と近代、周縁と中心といった構図を重ね、前者を脱却し後者へ至るという枠組みが前提となっているからである。だが中上後期作品において中心と周縁はきれいに二分されず、混淆したものとされる。したがって登場人物たちは確かに変容しているが、それは東京という「中心」の内の別の「周縁」へ安定するためであり、元来の路地的な周縁性は維持されている。またこれは結果、様々なレベルの周縁を見出し、そうした周縁同士が連帯するという主題へも繋がっている。第 2 節ではこうした中上の新たなヴィジョンが、ウォリック・リサーチ・コレクティブが提唱する「世界-文学」や、ポストコロニアル理論などで用いられる「グローバル・サウス」といった概念を先取りしていたことを示す。中上は 1985 年、「フォークナー、繁茂する南」という講演において、自作の性格を「繁茂する南」と名付け、世界中のいわゆる「周縁」、中上の言葉を借りれば「南」に見られるフォークナー影響下の作家たちとの連関を探っている。こうした「繁茂する南」のヴィジョンが、『地の果て』における秋幸の新たな振舞いや、『讃歌』結末における「世界-文学」的な「グローバル・サウス」の連帯へ至っている。

終章は、中断を挟みつつ 8 年以上にわたって執筆され、結局未完に終わった『異族』と、

作家の死後に発見された同作完結篇のためのシノプシスと考えられている「異族最終回三〇〇枚」を論じる。本論文で見てきた中上健次の世界文学論的詩学が、この大長篇で集大成的に展開している様を追いつつ、同作が完結できなかった理由を考察する。中上はこの作品に、ほとんどステレオタイプの様々な周縁的背景をもつ多くの登場人物を導入し（例えばウチナンチュのウガジン、アイヌのウタリなど）、満州国再興を目指すというほとんど荒唐無稽なプロットを描いている。こうした明らかな虚構性を通じてナショナリティやエスニシティの相対化を行ない、グローバル・サウスの連帯を模索していたのであろうが、小説の進展とともに明らかになったのは、たとえステレオタイプの最低限の歴史性であっても容易に相対化されることはなく、彼らの連帯は不可能だという事態であった。したがって『異族』は小説的試みとしては失敗作であるが、しかし、安易な予定調和は免れている。こうして各々の歴史がぶつかりあって不協和音を鳴らし続ける様は、「世界文学」という語がどこか孕む安定した調和へのアンチテーゼとして、世界文学論の可能性を体現している。